

## エドモンド・キャンドラーの『革命家—シリ・ラム』

—西洋教育とインドのナショナリズム—

小西真弓

サロス・コワスジーによれば、インドのナショナリストを立役者にした最初のイギリス小説『シリ・ラム』(*Siri Ram*, 1912年)は、イギリスの圧政に憤ったインドの青年がナシクの長官を暗殺した事件(1909年)を素材にして執筆されたと言われる。<sup>\*</sup>かつてキプリングにあこがれていた著者のエドモンド・キャンドラー(Edmund Candler, 1874～1926年)にとって、イギリスのインド支配は自明の理であり、インドの独立はごく一部のナショナリストが抱いた妄想に過ぎないように思われた。しかし渡印後に、ベンガルやパンジャブのカレッジで教職につき、学生たちが命がけのテロ活動や暴力革命に魅かれる現実を目の当たりにした彼は、キプリングのようにナショナリズムの問題を一笑に付すことができず、あえて愚かなインド青年シリ・ラムがテロ活動に身を投じるドキュメンタリー的な小説を描いた。シリ・ラムは物語の結末で、原住民のために献身したイギリスの行政長官を殺害して処刑される前に自害するが、真に断罪されているのは、彼を過激なナショナリズムの「生贄」にしたスワミ(ヒンドゥーの導師)や秘密結社の黒幕たちである。一方、物語に登場するイギリスの立役者たちは、インド青年の教育に頭を痛めたり、パンジャブの村々に蔓延ったペスト対策に命がけで働く善人として描かれ、その献身ぶりを称えられている。そのためか著者はイギリス帝国主義のプロパガンディストであるとの印象は否めないが、インドにおける教育や医療の問題を通して、異文化理解の難しさや帝国主義の矛盾を問いかけている。

キーワード：エドモンド・キャンドラー、インド人の教育とナショナリズム、『シリ・ラム』

<sup>\*</sup> テキストにはEdmund Candler, *Siri Ram: Revolutionist*, introduced by Saros Cowasjee (Bangalore: Arnold Publishers, 1990)を使用した。本文中の括弧内の頁数はこの版による。コワスジーの序は、テキストのIII～XI頁に付記されている。

### 序

「東洋というものは生涯を賭けるべき仕事である」<sup>1)</sup>というディズレイリ(Benjamin Disraeli, 1804～81年)の言葉は、エドワード・サイードによれば、「西洋人にとって東洋は単なる職場ではなく、東洋に関心をもつということが、西洋人の若者にとってあらゆるものを呑みつくす激しい情念としてとらえられるような光輝く何ものかであると理解されるべきである」という。<sup>2)</sup>

1) Benjamin Disraeli, *Tancred, or the New Crusade* (London: Longmans, Green, 1871) 141.

2) Edward Said, *Orientalism* (Harmondsworth: Penguin, 1985) 5.

様々な論議を呼び起こしたこのサイドの解釈はさておき、東洋に関わってキャリアを築いた「西洋人」には、ディズレイリのような政治家や帝国軍人ばかりではなく、東方からインスピレーションを受けて詩や物語を創作した作家たちも含めるべきであろう。彼らの中には現地を訪れることなく、間接的な情報によってインドの問題を論じたり、東洋のロマンスを描いて名を挙げた作家たちもあった。しかし、イギリス本国で「職場」や「激しい情念」の捌け口を見い出せない青年たちを引きつけたのは、やはり現地で大英帝国の拡大のために貢献したイギリス人のドキュメンタリー的な作品であったと思われる。実際にキプリングのようなインドに生まれ育ったアングロ・インド小説家の物語は、多くのイギリス青年の関心を大英帝国の辺境へ向けさせ、その足を現地へ運ばせた。

キプリングの作品に魅了され、その追従者となった代表とも言うべき作家、エドモンド・キャンドラーが、1896年にケンブリッジ大学を卒業後、インドへ赴いたのは、生来の放浪癖を満足させつつ道中の見聞を基にした作品を執筆して、作家としてデビューするためであった。<sup>3)</sup> イギリスから旅立つ前の彼は、「キプリングの見解が反映されているような作品すべてを読んで、インドを理解しただけではなく、当地を訪れたら物語に書かれているとおりでと認識するだろうと信じていた」<sup>4)</sup>という。ヒマラヤ山脈を仰ぎ見るダーズリンの学校で教鞭を取ったのは、それが『キム』の舞台背景を理解しつつ、登場人物たちの軌跡を辿る冒険旅行の資金作りにもなる魅力的な仕事であった故だった。実際に彼は休暇の合間に、ビルマ、カンボジア、タイ、南ベトナム等へ足を伸ばすチャンスに恵まれた。そのアジア各地での見聞は旅行記や雑誌の記事となって好評を博し、キャンドラーの名は作家として知られるようになった。しかし帰国後のイギリスでは、東洋を放浪したエリートにふさわしい仕事も、「激しい情念」の捌け口も見い出せなかった。そこで彼は1900年にインドへ舞い戻り、マドラス管区のカレッジで英文学の教授職にありつく。しかし、インド人の「文明化」にはミッションナリーのような情熱をもてなかったためか、彼はカレッジを去り、結婚後間もない妻を伴いつつ、『デイリー・メール』の特派員としてヤングハズバンド大佐 (Francis Younghusband, 1863～1942年) に同行し、チベットのギンツェ (Gantse) の騒乱 (1904年) に巻き込まれて左手半分を失ってしまう。<sup>5)</sup> そのような災難に宿命的なものを感じたためか、あるいは大英帝国が介入した複雑なアジアの情勢に目覚めた故か、キャンドラーにとって、東洋は正に「生涯をかけるべき仕事」に感じられたのであろう。以来、彼は1921年に帰国するまで、ベンガルやパンジャブ地方でカレッジの校長を務めたり、軍属の特派員としてインド兵と共にメソポタミアへ赴任した体験を基に、インドをテーマにした数多くのドキュメンタリー的な物語を執筆した。その中で、『シリ・ラム』はインドのナショナリズムを本格的にテーマと

3) エドモンド・キャンドラーの伝記的事項については、*Empire Writing: An Anthology of Colonial Literature 1870-1918*, ed. Elleke Boehmer (New York: Oxford UP, 1998) 474-75; Edmund Candler, *A Vagabond in Asia* (London: Greening, 1900); Edmund Candler, *Youth and the East: An Unconventional Autobiography* (London: William Blackwood and Sons, 1924) を参考にした。

4) Candler, *Youth and the East*, 27-28.

5) キャンドラーの『ラサのヴェールを剥ぐ』(*The Unveiling of Lhasa*, 1905) は、このチベットでの見聞を基にして執筆された作品である。Edmund Candler, *The Unveiling of Lhasa* (London: Thomas Nelson & Sons, 1905) 参照。

した傑作として評価されている小説であり、<sup>6)</sup> 本稿ではキャンドライのインド体験を考慮しつつこの作品を解説し、「東洋に関心をもつ」ということが、キプリングにあこがれたキャンドライにとってどのような意味があったのかを探ってみたい。

## I

インドに関心をもつことが、キャンドライにとって「光輝く何ものか」であったとしたならば、その対象はまずカシミールやヒマラヤ山麓の神々しい風景、狩にうってつけの動物等であった。初めて訪れたヒマラヤ山麓で、彼は信仰心の厚い様々な民族の女性たちが創造主と一体になるためにヨガに専念したり、祈りを捧げる光景に感銘を受け、神々の住むアジアの世界を体感した。『アジアの放浪者』(*A Vagabond in the East*, 1900年)や『ラサのヴェールを剥ぐ』(*The Unveiling of Lhasa*, 1905年)を読む限り、キャンドライが描くインド北部は、キプリングのキムに描かれている「ピクチャレスク」な世界のように感じられる。また、イギリスのインド支配が「野蛮に文明の光を」というスローガンを標榜するなら、インド人の高等教育に貢献する教職も「輝かしい」キャリアであったはずである。しかし、実際にキャンドライが教えたベンガルの学生たちは、英語の表面的な意味を理解し、イギリス人と意志の疎通ができるようになっても、英文学の底流となっているキリスト教精神や西洋思想を捉えることができなかった。彼らには、学士号を取るための大学入試に備えて、名作からの引用や登場人物の名前、名詩の下りを暗記することだけが重要であった。そのために、「博学なバブー（英語の書けるインド人書記）」が注釈を付けた「虎の巻」が使われた。誤植が多いためか、「虎の巻」を使うと、ジョン・キーツが「ナイチンゲールに寄せる」(*Ode to Nightingale*)の中で称える「ヒッポクレネの泉」(the blushful Hippocrene)は詩人に靈感を与えるギリシアの「ミューズの神々の泉」(The fountain of Muses)ではなく古代イスラエルの「モーゼの泉」(the fountain of Moses)に置き換えられた。またキーツがホメロスの世界を翻訳で読んで知った感動を「新たな惑星を発見した天体を観察する者になったような気がした」と歌った下りは、「家族の誰かが雷に打たれたような異常な経験」に喩えられた。<sup>7)</sup>しかし、ギリシア神話や聖書に親しみのない学生たちは、キャンドライが「イギリスの古典を学生たちと共に殺害し解剖している」<sup>8)</sup>と嘆いた誤読を気にかける様子もなかった。このようなインドにおける英文学教育の限界は、『若者と東洋』(*Youth and the East*, 1924年)の中で次のように述べられている：

私は自分の学生たちの知性を過小評価したのではない。ただ彼らは感受性が鈍いと判断しただけだ。彼らは、18世紀の二流詩人の文学的系譜を知っているし、形而上派の特徴を要約でき、手掛かりを与えられれば、シェイクスピアの初期、中期、後期の作品のどれかと言い当てた。私は注釈付きのテキストの秘密を知るまでは、この異文明の迷路の中で彼らが苦勞して見出した方策に驚い

6) Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974) 201 参照。

7) Candler, *Youth and the East*, 245–46.

8) *Ibid.*, 249.

ていた。それは、博学のバブーによって用意されたものだった。一つのテキストには10頁の注釈が付けられているので、テキストに関するいかなる質問、例えば著者の文壇上の地位、審美的価値や視点についての間に、ひどく間違った答が返されることはなかった。最もありふれた難点は、誤植だった……

私の学生たちは、注釈者であると同時に批評家でもあった。彼らがのろまだとか愚鈍と思うのは大いなる誤りであろう。西洋の事情や思想は、インドの学生たちにとって未知のものであるということをおぼえてはいけない。彼らは我々の精神的糧に対して、あまりにも几帳面かつ文字通りである。また情報を与えられても、自分たちの生活と無縁なものには想像が及ばない。そのために、彼らは著者が夢にも思わなかったような動機や推論を見出す……しかし彼らの推論は当然のことながら間違っている。<sup>9)</sup>

インド人学生の「著者が夢にも思わなかったような」英文学の解釈が如実に描かれている『シリ・ラム』が、著者のキャンドラー自身の体験に基づくものであることは言うまでもない。物語の中では、キャンドラーを連想させるスケインが、ガデンシュワール (Gadenshwar, <パンジャブにあると想定される架空の地>) のカレッジの授業で、キーツが称える「ナイチンゲール」が「足蹴にされない」理由は、「それが食用ではないから」というバナシー・ダスの解釈に興ざめする様子は、前述のようなエピソードに由来するものである。しかし、このような茶番劇のような英文学問答の元凶は、インド人側の感受性ではなくイギリス側の教育政策にある。そもそも学生たちは、各々の文学的能力や嗜好を考慮されず、大学入試のために「英文学」の無味乾燥な知識を詰め込まれていた。イギリス本国で教えられなかった英文学が、<sup>10)</sup> インドのカレッジでより早く主要科目にされたのも、下級官吏として雇うべきインド人の経済的な英語教育のためであろう。学生たちの中には理工系へ進みたかった者もあった。しかし、当局は多額な費用をインド人の教育に費やしたくはなく、テキストさえあれば授業ができる安上がりな文学教育偏重を改めようとはしなかった。ホワイトカラーを目指したバナシー・ダスのようなインドの青年たちにとって、英語は「憎き野蛮人」(35)の言葉ではあっても、大学入試が英語で実施されたので土語で教える中等学校へ進学することは憚られた。<sup>11)</sup> そのような事情を顧みれば、キャンドラーの教え子たちが、英文学の名作をインド流に解釈してイギリス人教師が困惑するのを面白がるのも、英文学崇拜を強制した文化的帝国主義に対する抵抗の表れのようにも感じられる。<sup>12)</sup> また、逆説的ではあるものの、インドの学生が英文学に心酔し、自由・平等の精神を称えるシェリーやバイロンのロマンティズムを理解したとすれば、それはそれでイギリスの支配者側にとっては不都合な事態

9) *Ibid.*, 244-46.

10) イギリス本国で英文学教育が開始されたのは、マッシュュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822 ~ 1888年) が授業科目から英文学が除外されていることについて苦言したのが契機と言われる。Gauri Viswanathan, *Masks of Conquest: Literary Study and British Rule in India* (New York: Columbia UP, 1989) 158 参照。

11) 東亜研究所編 (1941年) 『イギリスの対印度教育政策』復刻版 (龍溪書舎, 2007年) 81-82頁参照。

12) キャンドラーは、ベンガル州のマニクプール (Manikupur) からパンジャブ州のバロキ (Balloki) に転任した際、学生が改作したミルトンの『失樂園』の一節 (250-51行) によって天国から奈落の底に落ちた大天使に喩えられて歓迎 (?) された：

「祝福あれ、もろもろの恐怖よ！ この奈落に祝福あれ！ そして汝、地獄の奥底よ、汝の新しい教授を迎えよ！」 (\*原典は教授 (Professor) ではなく所有者 (Possessor) *Youth and the East*, 249 参照。

を招いた。確かに、19世紀にはケショブ・チャンドラ・センやラムモホン・ロイのように英文学の底流をなすキリスト教精神を積極的にインドの社会改革に取り入れ、イギリスの支配に協力的だったインド人も存在した。しかし20世紀に至り、より多くのインド人がカレッジで学んだり、イギリス留学を体験するようになると、彼らは学歴に見合った就職や出世がインド人に対して閉鎖的で、ミルトンが唱えた「言論の自由」やロマン派詩人が求めた「自由・平等」の精神が祖国では体现されない現実に目覚めていった。彼らはオックスフォードやケンブリッジへ入学を許可されるほど優秀であったとしても、あくまでも被支配民族の一員であり、「イギリス人」と肩を並べる存在になることを期待されていたわけではない。しかれば、彼らがシャムジ・クリシュナヴァルマ (Shyamji Krishnavarma, 1857～1930年) のように、ハーバート・スペンサーの思想を信奉しつつ、アーリア・サマージやナショナリズム運動へ傾倒していったのも当然の成り行きと言える。<sup>13)</sup> それが、支配者側にも予測できた状況であったことは、ヴァレンタイン・チロル (Valentine Chirol, 1852～1929年) の次のような発言に反映されている：

現在、私はインドの不穏な状態を招いた我々イギリス人が当地へ導入した教育制度の欠陥が、いかに嘆かわしいかを論ずることを中止するつもりはない。その教育制度は中途半端に教育された労働者を作り出したが、失業中、あるいは雇えないような多くの輩を生み出しがちだった。その事実を否定したり、無視できる者は殆どいない……それは西洋思想の皮相に多少なりとも浸ったが、同時に多かれ少なかれインドの現実生活から全く切り離された危険な混成物 (ハイブリッド) を生産してしまった。<sup>14)</sup>

## II

ヴァレンタイン・チロルの不安を具体化したような物語の主人公、シリ・ラムには、イギリスのロマン派の詩に何の感動も覚えない「詩的想像力が欠けた」著者の教え子たちのイメージが投影されている。ワーズワースの「雀の巣」の中にある「[エメリンは] 雀の巣を怖がるかのように見た……」 (“She looked at it as if she feared it, Still wishing, dreading to be near it”) という一節について、「ヨーロッパの雀は凶暴な鳥だからエメリンはその巣に近づいて怒らせるのが怖かった」(44) というシリ・ラムの解釈は、その典型的な例として描かれている。いくら辞書をひいて英単語の字面を調べつつ、シェリーやキーツの詩を暗唱しても、彼らの自然を愛する心や思想を十分に理解することはシリ・ラムやバナーシ・ダスには困難であった。学生たちに英文学を教えることに虚しさを覚えたスケインは、インド人は

13) クジャラート州のマンドゥヴィに生まれ、アーリア・サマージストであったクリシュナヴァルマは、ムンバイのハイスクールに通うかたわらサンスクリット語を学び、オックスフォード大学で修士号を取得した。彼はサンスクリット学の権威、モニエール・ウィリアム教授の助手を務めたりしたが、1885年インドに帰国後、様々な経緯から反英に傾いていった。1905年にイギリスへ渡り、後に過激なナショナリストの巣窟として監視されるようになった「インディア・ハウス」をロンドンに構えた。インドの独立世論を煽る『インドの社会学者』(*Indian Sociologist*) を当地から発刊し続けた彼は、当局からの糾弾を逃れるために、パリへ渡り出版活動を続けた。Alex Tickell, *Terrorism, Insurgency and Indian-English Literature, 1830-1947* (London: Routledge, 2012) 139-42 参照。

14) Valentine Chirol, *Indian Unrest* (Middlesex: Echo Library, 2007) 11.

「最も味気のない想像力に欠ける人間」と感じるようにさえなってしまう。しかし、男女隔離や幼児婚の風習をもつヒンドゥー社会に育った彼らが、サッカレイやステューブンスンの小説に描かれる男女の駆け引きやプラトニック・ラブのエピソードを、不謹慎に感じるのも無理からぬことであった。また具象的な事物といえども、インドの農村モグラオン (Mograon) に生まれ育ったシリ・ラムにとっては、「雀」は詩の題材とするべき美しい鳥ではなく、生活の糧を奪う天敵に他ならない。その巣の中の卵を見ても、エメリンが抱くような自然に対する畏敬の念を覚えなかった。カラー写真も映像教材もないような年代にあって、インドの密林しか知らないような学生に、文字情報だけでキーツの憧れたイギリスの森を連想しろというのも無理な話であろう。ヨーロッパの牧歌詩の伝統は、インドの苛酷な風土や貧しい農村社会とは無縁であり、ヒンドゥーの古典に通じるものでもない。シリ・ラムにはステューブンスンが感激した「焼き牡蠣」や「ソルテーヌ産のワイン」の味はもちろん、フランスやベルギーの牧歌的風景さえ想像できない。そのような事情は、パンジャブの村々でペスト対策に奔走した行政長官メリヴェイルが、モグラオンを視察し、シリ・ラムの家でステューブンスンの小説『奥地への旅』(*An Inland Voyage*, 1878年)を発見して驚く様子に反映されている：

家々は総て内も外も泥でできた同じ作りだ。そしてシリ・ラムの父親ムール・チャンドの皮膚の色から村の外にあるバニヤンの木や井戸の傍にある瓦礫に至るまで、色合いが変わるものはほとんどない。シリ・ラムが泥の小屋で、伊達男や妖艶な女性、ベリンダの化粧室の様子、ブランシュ・アモレイやエセル・ニューカムを我がものにする物語を読み上げるのを想像してみたまえ……。

シリ・ラムには一種類に属する男女、食べ物、家、生きるための肉体的緊急性や困惑から生じるような考えしか頭になかった。イギリスの男女は、彼にとって粗暴な暴力的現象に過ぎなかった。しかるに、彼の精神の製粉機は、人生の案内役としてサッカレイやポーブ、ステューブンスンをゆっくりとかみ砕くのだ……モグラオンでは、泥は人の精神にも浸透している。塵まみれの精神は、浮きかすを支えようと入江の河床の中で泥を動かし水の流れに抵抗する蟹のように、それなりの堅さや色合いもつように粗く削られている。教育はその削る工程を早めるためにあり、初期教育の工程は劣悪で詳述するのにも憚られる……至る所で、父親たちは、流れる川にさらされた新しい層に甲殻類を馴染ませるような自己防衛的な進化の本能に動かされて、息子たちを学校に送る。息子たちは、F.A. (Faculty of Artsの略) となり、その後は学士になるだろう。ホブスン [警察長官] のような在印イギリス人の半数は、そのような学位の取得だけを目指に、<sup>15)</sup> 有機化学を生かじりする英印混成物に憤った。しかし、どのように不細工に愚かしく粗製されようと、初対面では可愛く見えない連中になっても結局、学士は勉強によって苦しめられず、太陽によって焼き上げられた粘土細工よりはましな人間であろう。

(80-83)

シリ・ラムのようなイギリス式教育を受けたインド人が、その文化を生半可に身につけた「英印混成物」として嘲笑の対象となるエピソードは、数多くのアングロ・インド小説に組み込まれている。しかし、「河床の中で泥を動かす小さな柔らかい蟹」に喩えられたシリ・ラムには、キプリングの描いた西洋かぶれのベンガル・バブーのようなハイブリッド性も、

15) 物語の設定年代 (1910年前後) のインドでは、10年間の初等、中等教育を終えて「カレッジ」に入学し、2年間でF.A.を取得した学生は学士 (B.A.) コースへ進む資格を得た。学位を出すのはカレッジではなく加盟先の大学 (University) であった。 *Educational Documents in India, 1813-1986: Survey of Indian Education*, eds., B.D. Bhatt & J.C. Aggarwal (New Delhi: Arya Book Depot, 1987) 9-21 参照。

モードダイヴァーが断罪したナショナリストの狡猾さや野蛮性も投影されていない。シリ・ラムのモデルとされるナシクのジャクソン殺害事件(1909年)の犯人、アナタ・ラクシマン・カンハーレ(Ananta Luxman Kanhere)は、マハーラーシュートラ州出身のバラモンで、<sup>16)</sup>チロルによれば、「我々がインドに輸入した西洋教育と、現在の政治的扇動によって推進される信仰覚醒運動から生まれた奇妙な混成物」であったという。<sup>17)</sup>しかし、シリ・ラムはヒンドゥー教徒ではあってもバラモンではなく、ジャット族に属する文盲の農夫の長男である。ジャット族といえ、元々は農業や牧畜業に従事した民族であり、裕福な土地所有者といえどもベンガルの富裕層のように西洋文化に傾倒することもなかった。<sup>18)</sup>彼らが、キャンドライーが述べるほどに、<sup>19)</sup>想像力やイニシアティブに欠け猪突猛進型の民族性をもつのかどうかは定かではないが、シリ・ラムが過激なナショナリストによって「生贄」にされた不幸な運命に関しては、そのネガティブな生育環境や後先を考えない性格も大きく影響している。前記の引用からも理解できるように、そもそもシリ・ラムがカレッジに進学したのは、高等教育に見合う能力や適性があったためではなく、学位を取ることが父親の「投資目的」に合致したためであった。彼は7歳で小学校へ入るために、ガデンシュワールへ旅した時に、「イギリスの同年の少年だったら好奇心が旺盛であるはずなのに、周囲に何も興味を示さない」(25-26)ような少年であった。10年の初等・中等教育のおかげで英語はそれなりに理解するようになったものの、「彼の思考力は、在学中にほとんど進展しなかった」(36)。またイギリス人がリーダーシップの育成に必要なフットボールやクリケットのような競技にも全く興味を示さなかった。しからば、カレッジの生活は彼にとってかなり苦痛であり、スワミ・ナラシムハ・サレンドラナスの<sup>20)</sup>「ヴェーダに帰れ」を標語とする国粹主義な遊説に、何となく自分の人生が変わるような気がして魅かれるのも不自然ではない。英語をそこそこに習得した彼は——幸か不幸か——イギリス支配者の圧政や搾取を暴露するナラシムハの

16) テキストに序文を加えたサロス・コワスジー(Saros Cowasjee)によれば、『シリ・ラム』はマハーラーシュートラ州のヒンドゥー聖地ナシクの長官、ジャクソンが帰国の直前に、当地の劇場でカンハーレによって射殺された事件を題材にして描かれたと言われる。ジャクソンはマラータ語を学んで「パンディット・ジャクソン」と呼ばれるほど善良な行政長官と評されていたので、この事件は当局に大きな衝撃を与え、カンハーレとの二人の共犯は死刑、彼らのシンパと見なされた30人余りが様々な刑罰を蒙った。『1857年のインドの戦争』の著者として有名なV.D. サヴァルカルは、カンハーレを煽った罪で終身刑を宣告された。この事件に関してはテキストのV-VII；“Nasik Conspiracy Case—1910”，<http://bombayhighcourt.com>参照。

17) Chirol, *op.cit.*, 47.

18) ジャット族については、*Collier's Encyclopedia: with Bibliography and Index*, eds. Lauren S. Bahr & Bernard Johnston (New York: P. F. Collier, 1995) XIII, 506参照。

19) Candler, *The Sepoy* (London: John Murray, 1919) 115-24参照。

20) ナラシムハはベンガルのリンガーヤット派として登場しているが、リンガーヤット派はベンガル州では少数であり、本来はカーリ神ではなくシヴァ神の崇拝者と言われている。彼があえて「生贄」を求めるカーリ神の崇拝者として描かれているのは、シリ・ラムをナショナリズムの犠牲にした彼の野蛮な狂信性を強調するためであろう。また「ベンガルの」という帰属性にも、当地から教養のあるエリートや過激なナショナリストが多く生まれた歴史的背景が配慮されている。ちなみに、ナラシムハは神像を祭ることで、アーリア・サマージに仲間がいるものの、そのメンバーとは言えない。またケンブリッジ大学でヴェーダ哲学を教え、ヨーロッパ各国の言語を習得してインドのナショナリズムを海外に唱えたという彼の経歴からは、クリシュナヴァルマのイメージが連想される。橋本泰元[他]編『ヒンドゥー教事典』(東京堂出版、2005年)185-89頁参照。

匿名のパンフレットを読解できた。その内容がたとえ「学校で教えられたとおりではなく、歴史の書き換え」(45)であったとしても、西洋の文化・制度を強制されて自尊心をなくしていた彼には、「慰め」となった。そこで彼は同様のパンフレットをバナージ・ダスやラクミ・チャンドと共にクラスメートに配り、それをスケインに見咎められてカレッジから放校されてしまう。

シリ・ラムの退学処分は、反英分子を当局が徹底的に取り締まった歴史を振り返ると厳しすぎる処分とも言えない。実際に当時のインドには言論や出版の自由がなく、私文書さえ検閲される有様で、反英の嫌疑をかけられた容疑者は徹底的に追及された。そのような厳しい弾圧は、1905年のベンガル分割令を契機に過激化したナショナリストが各地に次々と秘密結社を作って武器を密輸入したり、弾薬を製造してテロリズムを実行するのを未然に防ぐためであった。ベンガルの過激派ナショナリストたちの多くは、ヒन्दウー教徒の青年、教師、法律家等、英語の読めるエリートたちであった。そのために当局はカレッジにも反英的な活動や言論の徹底的な取り締まりを迫った。反英分子を出したカレッジは、大学との加盟を断ち切れ学位を出せなくなったり、補助金をカットされた。それ故、学生にそれなりの愛情をもつスケインがシリ・ラムを退学処分にするのは、カレッジを存続させて他の教え子たちを守るためであると言えよう。しかし、そのような弾圧は、火に油を注ぐようなもので、より多くの学生をナショナリズム運動へ走らせた。それを懸念したスケインはシリ・ラムに就職先をあっせんする。しかし、仲間のバナージ・ダスやラクミ・チャンドを一年の休学処分だけで済ませ、自分だけを退学処分にした教師の世話になることは彼の自尊心が許さなかった。かと言って、「投資」を無駄にした父親の元へ帰るのも憚られた。寄る辺のないシリ・ラムは援助を求めて「学生進歩会」(Student's Improvement Club) 会長ラムジ・ダスの薬局を訪れるが、隠れテロリストの彼からナラシムハの教えを乞うように言いくるめられて、彼の巣窟のあるカシミールへ送り込まれる。以前からナショナリズムのための「生費」としてシリ・ラムを狙っていたナラシムハは、インドのナショナリズムがパリやロンドンのインド人ばかりではなく、イギリスの労働党員やアメリカのアイランド人にも支援されていることや『バガヴァッド・ギータ』の教えを説いて、シリ・ラムをテロリストの仲間へ引きずり込んでいく。

### III

シヴァ神とヴィシュヌ神の区別もつかなかったシリ・ラムが、カシミールの山中でナラシムハのような人物に過激なナショナリズム思想を鼓吹されるエピソードは、どれほど史実として信憑性があるのだろうか。それはさておき、イギリス人の圧倒的な文化や権力に劣等感や憎しみを抱いていたインド人にとって、「ヴェーダの中には近代科学の知識や技芸が含蓄されていた」と唱えるアーリア・サマージの教えや、<sup>21)</sup> クリシュナ神のアルジュナへのカ

21) Dhanpati Pandey, *The Arya Samaj and Indian Nationalism 1875-1920* (New Delhi: S. Chand, 1972) 36-44参照。



リスマ的な教えを想起させる次のようなナラシムハの言葉は、<sup>22)</sup> インド人としての自尊心を取り戻し、ナショナリズムへ心酔させられるものであったと言われる：

クリシュナのアルジュナへの教えを思い出せば、お前が後戻りすることはないだろう……殺せ、そうすればお前は神々のいる天国 (Swarga) へ行ける。地上では勝利の栄光に浸れるだろう……血を流すことを恐れるな、「反逆だ」とほざく弱虫の言葉など気にするな。お前は反逆の罪を犯すのではない。そもそも誰に反逆すると言うのだ。答える。触れたり、その影だけでヒンドゥー教徒を穢して清めを余儀なくする毛唐共がインドを支配できるとも言うのか。

白い顔をした悪魔どもを聖なるインドの大地から一人でも駆除した者は聖人となる……お前はインドから不信心な毛唐共を一掃する神の化身ヴァルキ (Valki) だ……<sup>23)</sup> そのメッセージはインドの青年、シリ・ラムという人間に権化したヴィシュヌの化身ヴァルキに伝わった。それは最も活力のない人間にインスピレーションを与えて、早々に彼を生贄としていかなる祭壇にも送り込めるほど十分なものであった。(187)

ナラシムハによって「ヴァルキ」に祭り上げられたとはいえ、パンジャブに戻ったシリ・ラムには仲間のモハン・ロイのように「白い顔をした悪魔」を射殺して自害するほどの「殉教者」魂も度胸もなかった。またハリドワールに出向いてアーリア・サマージの導師がインド人の墮落を強調して、「真実を語り義務を果たすように自分たちが変わらなくては、他人 [イギリス人] を変えられない、それまではイギリス支配に甘んじなければならない」(208-10) というような説にも魅かれなかった。シリ・ラムを苛立たせたのは、インド人の墮落や後進性ではなく、イギリス支配そのものであった。「ヴァルキ」の役割を果たすためには、インド人が自発的に社会改革することを唱えるアーリア・サマージの活動は悠長で物足りないように感じられた。その一方、彼はカングリ (Kangri) にあるグルクラ・アカデミーの無給教師になったラクミ・チャンドから学園に身を寄せるように勧められても、その厳しい学園生活には馴染めそうもなく、<sup>24)</sup> 気が進まない。そのような心境を察したラムジ・ダスは、かつて「政治的ミッシヨナリー」を目指していたシリ・ラムのナショナリズムを喚起するために、左翼雑誌 *Kali-Yuga* (「この世の終わり」) の編集者として彼を採用する。イギリス人の目に留まる記事を掲載する雑誌の編集は、地下活動をモットーとするナラシムハの意向にはそぐわなかったが、その仕事は英語教育を受けたシリ・ラムの自尊心と反英感情を同時に満足さ

22) 古代クル国において親族の百王子との戦を罪悪と感じて怯むアルジュナにクリシュナは「そのような感傷は女子には寛恕されても戦士には許容されない。アルジュナ、この危機に際して、その悲嘆はどこからきたのか。それは己を汚すもの、天国の門を閉ざすものだ」と叱咤したという。ちなみに、この一節はケンブリッジ大学の秀才、オーロビンド・ゴシュ (Arabindo Ghose, 1872 ~ 1950年) の精神を貫いて、彼を過激なナショナリズムに駆り立てたという。『バガヴァッド・ギータ』上村勝彦訳 (岩波書店, 1992年) 27-31頁; 大川周明『亜細亜建設者』(第一書房, 1941年) 275-84頁参照。

23) “Valki” はヴィシュヌの最後 (10番目) の化身, “Kalki” (救世主) のもじりだと思われる。

24) アーリア・サマージの会員がハリドワール (Haridwar) に設立した (カングリ) グルクラ学園 (Gurukula Academy) は、ヒンドゥー語による授業をインド人のみで実施する「国民教育」(National Education) 機関であった。『シリ・ラム』に描かれているように、「ブラフマチャリア」と呼ばれる寄宿生たちは「清く貧しく従順」を8歳の入学時に宣誓させられ、25歳の卒業時まで約18年間帰省することは許されなかった。ヴェーダの学習による人格教育や体育が重んじられたが、英語、科学等の一般教育も教えられた。授業料、寄宿舎代は無料であったと言われる。キャンドライはアーリア・サマージと過激なナショナリズムの結びつきを示唆する一方で、この学園についてはシリ・ラムのような青年を政治活動から遠ざけて、人格を向上させる場として評価している。グルクラ学園については、Pandey, *op.cit.*, 102-06参照。

せるものであった。有頂天になった彼は警察の手入れを受けて「監獄行き編集者」(prison editor) にされそうなことも気につけない。そこで憎き前インド総督カーゾン卿に対する悪口雑言を並べ立てた雑誌のキャッチフレーズ——「背中の曲がったパンジャンドラム<陸上機雷>」, 「悪魔」, 「キリストを裏切ったユダ」, 「人類の敵」, 「時代遅れの帝国主義者」等々——を寄せ集めて自分の記事を作り上げる。その記事はシリ・ラムの編集の下手際により「一服であり聞いたこともない病気によく効く。その効果は雷に打たれるようだ」という薬の広告と入り交じり、幼い頃に脊椎を痛めて体の不調に悩まされていたという<sup>25)</sup>カーゾンの毒殺を示唆するような印象を与えるものとなる。あわてたシリ・ラムは雑誌記事の8頁が順序不同だという「予告」を追加するが、その“NOTICE”(予告)は“NO NOTICE.”と組まれて最終的に「とんでもない」雑誌が刷り上る。それは地元のイギリス人たちの「お笑いの種」になるが、「インド帝国の君主から英領インドの統治権を奪おうと陰謀を企て、様々な階級の臣民の間に憎悪と敵対感情を高めた」(240)かどでメリヴェイルから2年間の重禁固刑を言い渡されるものであった。

軽率にも生半可に英語が理解できるようにシリ・ラムが「監獄行き編集者」に仕立てられたことを察知したスケインは、その不運を哀れむ。彼には、シリ・ラムがもっとよく英語のニュアンスやイギリス流のユーモアを理解していれば、法律の網の目を潜り抜けるような編集者になり、監獄行きは免れたようにも思われた。しかし、シリ・ラムは罪を一人で被って秘密組織の内幕は一切語らなかつた。印刷所が警察に急襲された時、原稿を燃やしていた彼は、わざわざ残っていた自分の原稿を見せて罪を告白し、雑誌の細かな内容を説明する有様であった。警察に連行される「彼の顔は輝き、微笑んでいた」(229)。しかし監獄に入ってみれば、彼のような政治犯の扱いも「カーストのない」ごろつきやジプシー、「カラスやヘビを食べる」犯罪者たちの待遇とさして変わらなかつた。昼間はそのような連中ととうもろこしを挽き、夜は一緒に閉じ込められた。彼と同じような3人の「教養のある」収容者も、囚人服を着せられれば、劣悪な環境のために常習犯罪者と同様、粗野で墮落しているように見える。監獄内には宝石を奪うために少女を殺害した死刑囚さえいた。凶悪犯も「祖国の救世主」も同じ方法で処刑されることを想像した彼は憂鬱になり、ヨガに専念することもできなくなる。スケインが面会に来て、ベッドに背を向けたままで顔も見せなかつた。監獄生活は彼を矯正させるどころか、自分を劣悪な境遇に追い込んだ行政長官メリヴェイルに対する憎悪を募らせるばかりであった。

#### IV

刑期を終えたシリ・ラムが間もなくメリヴェイルを射殺する気になったのは無論、復讐心からであった。とはいえ、いかに彼が憎くても人一人を殺める覚悟は監獄を出た後のシリ・ラムにはなかつた。彼の肉体や精神はそれほど逞しくはなく、射撃の腕も未熟であった。ま

25) 浜渦哲雄『大英帝国インド総督列伝：イギリスはいかにインドを統治したか』(中央公論新社, 1999年) 152頁参照。

た監獄へ戻ったり絞首刑にされるのも厭わしかった。頼みの綱のナラシムハからは入獄して以来、何のメッセージもない。生きがいも見つからず孤独になって友人のバナシー・ダスを訪れても留守だった。そのような彼の心隙を突くかのように、ラムジ・ダスは秘密組織の仲間と共謀して彼を再び取り込んでありそうもない革命話を吹き込み、その口火を切るためにメリヴェイルの暗殺役を務めることを勧める：

ラムジ・ダスは生贄のシリ・ラムが思いがけず怯むのに気付いた……

「シリ・ラム、もし捕まっても抵抗するなよ。裁判の日は決定されるかもしれないが、その時に裁判所が占拠されていれば、我々が判事になっているだろう。監獄の扉は開けられる。そして革命の手本になった人々が——」

「もし僕が捕まったらだつて？」シリ・ラムはどもった。「今夜やれっていうのか。」……

「我々は君を待っていたんだよ、シリ・ラム」と彼は言った。「我々の組織は完璧だ。今夜すべての都市で青年たちが蜂起するだろう。他の何百という役人共が一斉に葬られる。」

「他の役人たちもだつて？」

「この暴君を殺害すれば、君は革命の火付け役になれるだろう。」

「どの暴君だ？」

「君を断罪した奴だよ。」

「メリヴェイルか？」

「君のために奴をとっておいてやったよ。」

その名前を聞いて、シリ・ラムのくすぶっていた抵抗感は消えた。革命の火付け役になることに同意したくなり、そういう心境に傾いた。ランジ・ダスを頭から信用しているわけではなかった……しかしシリ・ラムは夢に飛びついた。彼には他に道が残っていなかった。(267-68)

ランジ・ダスから唆されたシリ・ラムは彼の指図どおり、びくびくしながらマリゴールドの花束の中に隠し持っていたピルトルで、友人たちに見送られながら帰国するために列車に乗り込もうとしていたメリヴェイルを射殺する。恍惚状態にあった彼は、逃走することも毒を飲まなくても自殺することもなく、肥満気味のイギリス婦人にねじ伏せられ、あっけなく官憲に身柄を引き渡され再び囚われの身になってしまう。しかし、彼は、「ヴァルキ」の化身になったかのように、取り乱すこともないように見えた。メリヴェイルがペストの流行した村を救った行政長官だった故に、彼の暗殺は「全インドが衝撃を受ける非道な犯罪」と見なされたが、シリ・ラムには罪悪感も後悔の念も感じられなかった。死刑判決を受けた時、彼は「頭を真っ直ぐにあげ」次のように暗記していた「英雄的で手短な挑戦的演説」を判事に向かってする：

あなたは私を明日にでも絞首刑にできる。だが、私の精神を滅ぼすことはできない。その精神は新たな別の荣誉となって受け継がれる。そして15年後にもし一人でも不信心な毛唐が残っていたら、その時も奴らは今のような戦いを挑まれるだろう。篡奪者は滅びるように運命づけられている。彼らは——  
(290)

イギリス側に都合の悪そうなこれから先の演説は、シリ・ラムが法廷外に引きずり出されるために遮られるが、彼は地元のインド人から神格化され、街頭では彼の写真が売りさばかれる。バナシー・ダスは警察官に連行される彼が『『私は嬉しい』』と言って処刑場に向かう殉教者のごとく強気で「罪の意識も無く輝いている」ことを誇った。「シリ・ラムは永遠の名声を買ひ、その代償は要求されない」(291)かのように思われた。しかし、彼の落ち着

いた態度は、ラムジ・ダスが仄めかした「革命」の夢にすがっていた故であった。蜂起は判決の日には間に合わなかったが、監獄に弁護人が毎日来ては革命が手間取っていることを伝えに来たために、彼は「それは15日もすれば実現するだろう」と楽観していた。しかし、日が経つにつれ「革命」がなかなか始まらないことに不安になった彼は、「イギリス人が今だに主権を握っているのか」(291)としつこく看守に尋ねるようになって精神異常を疑われる。シリ・ラムの異変が周囲に広まると彼の友人たちは情状酌量を求めるようになり、軍人たちが精神鑑定のために彼を慰問に来るが、どのような質問にも相変わらず罪の意識も無く平然と答えるので、正常と見なされて減刑は見送られる。間もなく話相手もなくなり、独房に閉じ込められたままの彼は孤独に陥り、看守に三日後に処刑されることを仄めかされて恐怖にとりつかれ、ラムジ・ダスから隠し持たされた毒薬を飲んで自害する。シリ・ラムに面会を求めて監獄を訪れたスケインとバナシー・ダスは、それを所長から伝えられ、彼の哀れな最期を悼む：

所長は二人に入口で出くわして、スケインだけを脇に引き寄せた。バナシー・ダスは二人が小声で話しているのを聞いた。彼はシリ・ラムが既に絞首刑にされてしまったと思って怖くなった……彼には所長が「君はその友達をシリ・ラムに対面させてやったほうがいいだろう」と言うのが聞こえた……バナシー・ダスはシリ・ラムに覆いかぶさってその耳元で叫んだ。

「シリ・ラム！ シリ・ラム！ シリ・ラム！」

彼は荒々しくシリ・ラムを揺さぶった。そして声を段々大きくして呼び続けた。

「シリ・ラム！ シリ・ラム！」

しかし、スケインはバナシーの腕に手を置いた。

「遅すぎたんだよ」と彼は言った。

バナシー・ダスの声は途切れた。彼はすすり泣き出した。

「彼は死んでしまった！ 彼は死んでしまったんだ！」

「哀れな子だ」というのがスケインの内心のつぶやきだった。「彼には全く見込みがなかった。」

(303-04)

シリ・ラムの遺体に対面したスケインの「哀れな子だ」という「内心のつぶやき」は、教え子の悲惨な最期に対する偽らざる思いと言えよう。しかし、彼がそれを口にできないのは、インド支配に関わるイギリス人としてシリ・ラムの死刑判決、しいては帝国主義を正当化しなくてはならないという義務感からであろうか。確かに20世紀初頭に反英感情が高まったにしても、殺人をいとわぬ暴力革命はイギリス人は勿論、インド人一般にも受け入れ難いものであった。テロリズムへの恐怖感は、犠牲になるイギリス人がメリヴェイルのような人格者であればインド人にさえ高まったようにも思われる。それはさておき、彼を殺害したシリ・ラムが20歳そこそこで、過激なナショナリズムの「生贄」として命を奪われる一方で、陰で糸をひいたナラシムハやラムジ・ダスが罪を逃れたことに、イギリスの読者は流飲が下がる気持ちがしなかったのではないだろうか。また、スケインのようなインド人の教育に関わるイギリス人は、多少なりとも責任感や無力感を感じたかもしれない。スケインと同様に、一般読者のシリ・ラムへの哀感、彼の育った環境の後進性や思考力の鈍さが強調されればされるほど深まったと思われる。またシリ・ラムが死刑に値するほど凶悪犯に感じられない

のは、ナラシムハやラムジ・ダスの邪悪さが強調されているためであろう。しかし、インドのナショナリストの目には、シリ・ラムが10年間の在学中に「思考力はほとんど進展しなかった」少年であり、祖国のためというよりは個人的な恨みからテロリズムに加担し、果ては監獄内で自殺するという顛末は、イギリス支配の軛から逃れたい自分たちの大望を見くびっているように映ったに違いない。一連の物語の展開や登場人物の性格付けには実情に何となくそぐわない、即ち作者の恣意性が反映されているように感じられる。

## V

シリ・ラムのモデルとされるカンハーレの詳しい思想的背景や性格は定かではないが、彼は仲間と共に絞首台の露と消え、マハラージュートラではナショナリズムの殉教者として歴史に名を残している。また物語の中で言及されているムザッファール事件（1908年）の犯人、クディラム・ボース（Kuhdiran Bose 1889～1908年）は、評判の悪かった判事キングズフォード（Kingsford）の暗殺を企て誤って二人の婦女子を殺害して責任を感じ、控訴することもなく堂々と死刑判決を受け入れたといわれる。彼の共犯プラフッラー・チャキ（Prafulla Chaki, 1888～1908年）は逃亡中に捕縛されそうになり、ピストル自殺を遂げた。<sup>26)</sup> 20歳前後の彼らには若者特有の性急さ、分別の無さがあったとはいえ、シリ・ラムの性格に投影されている「臆病さ」はなかったと思われる。婦女子を巻き込んだインド青年の革命的テロリズムが、穏健派のナショナリストから批判されたのも最もな話ではあるが、彼らの「殉教者」精神はインド人に誇りを取り戻させてナショナリズムに拍車をかけることにもなった。また、彼らがナラシムハのような扇動者にどれほど煽られたかどうかは知るよしもないが、ロンドンでカーゾン・ウィリー（Curzon Wylie）を射殺したインド人留学生マダン・ラル・ディングラ（Madan Lal Dhirga）には、イギリス人の下で郵便船の火夫として働いた折に人種差別に悩んだ経験もあり、そのテロリズムにはそれなりの動機と主体性があったと思われる。ウィリーが裁判中に陳述したかった声明書の内容からは、<sup>27)</sup> 彼がイギリス帝国主義にまつわる「富の流出論」や、「暴力」あるいは「謀略」で築き上げられた英領インドの歴史にも通じていたことが窺い知れる。インドから海外に雄飛しイギリス人と接触した彼は、シリ・ラムのような「河床の中で泥を動かす小さな柔らかい蟹」に喩えられる青年ではない。

ディングラの声明書は反英感情の高まりを恐れた判事から陳述を差し止められたといわれるが、それはインドで彼のシンパによって出版され、下記のような内容であったことが公にされた：

私はもしドイツ人がこの国イギリスを占領し、彼らと戦うイギリス人が愛国的だと言われるなら、イギリス人と戦った私の事件をより正当化できることを主張します。私は過去50年間に8千万人のインド人が亡くなった責任をイギリス人に負わせます……そして毎年何百ポンドもの大金がインド

26) この事件に関しては、ビバン・チャンドラ著 粟屋利江訳『近代インドの歴史』（山川出版、2001年）257頁；岩永博『インド民族史』（今日の問題社、1944年）323-24頁参照。

27) カーゾン・ウィリーの暗殺事件、ディングラの声明書の内容については、Tickell, *op. cit.*, 133-38参照。

からこの国へ奪い取られた責任も……私は慈悲やそれに相当するものを望んで訴えているわけではありません。私はイギリス人が私に死刑の判決を下すことを望みます。そうなったら、祖国にいる同胞の復讐心はより激しく燃えるからです……

この声明書が出回った1909年当時、インドにいたキャンドラーがデングラのテロリズムに衝撃を受け、彼の声明書を目にして複雑な思いを抱いたことは想像に難くない。「富の流出論」や、イギリスが「暴力」や「謀略」でインドを征服した事などはナショナリストの常套句であり、彼にとって新たな情報ではなかった。しかし、彼を脅かしたのは、上記の声明書が示唆するような暴力の連鎖、突き詰めれば、イギリスが暴力によって奪い取ったインドが最終的に暴力的手段で奪い返される可能性ではないだろうか。物語の中ではキャンドラーはスケインの口を通して反英を煽るパンフレットを配ったシリ・ラムたちに、イギリス人がいかにインドの発展のために尽くしたか——耕作地を広げ、鉄道を敷設し、云々——を語りイギリス支配の正当性を弁明する。しかし彼は「ナショナリストの御託は大嫌いだ。インドはイギリスの所有物だ。君たちの一人のザミンダール（徴税請負人）の所有権地が、先祖が剣で奪い取ったか、あるいは奉仕によってその土地を与えられた藩王の領有するものであるように……」と主張することに気がとがめた。イギリスの歴史の教科書には書かれていないロバート・クライブの「イギリス紳士にあるまじき」ベンガル征服の逸話をインドで知った彼は衝撃を受け、ナショナリストの「御託」にも一理あるような気がしたのであろう。「もし私が若いベンガル人なら、パンデー・マータラム<母なる祖国に命をささげる>の神殿に入り浸るだろう……秘密組織に心酔し、自己否定的な愛国主義者が私に話しかけてきたら自分が気高くなったような気がするだろう。私は自由、独立、犠牲の夢を見るだろう」<sup>28)</sup>というキャンドラーの告白は、シリ・ラムたちの立場からインドのナショナリズムを理解しようとした努力を浮き彫りにしている。しかし、彼は「ナショナリズムは祖国のイギリス人にとっては美德であり、大英帝国の従属民には病であると見なされる環境に育った」。「自由はあらゆる状況下のどんな種類の人間にも与えられるべきものではなく、資格のある者だけに授けなくてはならない説に同調する。私の支配下にあるこの学生たちにはその資格がない」<sup>29)</sup>というのが彼の「偽らざる見解」であった。それは、国民の80%以上が文盲の貧しい農民で、牛の保護問題一つでヒन्दゥ教徒とイスラム教徒が喉首を掻き切り合うようなインドに滞在した経験に基づいているとも言えよう。キャンドラーが置かれた時代背景を考慮すれば、「インドはヨーロッパの一国のような独立国になれない」と述べたとしても、それは帝国主義者の単なる保身のための暴言だと非難できない。カレッジの教師であったキャンドラーには、さしあたって、治安を維持し教え子をテロリストの「犯罪人」にしないように、自分たちがインドに居座ることを弁明する必要があった。そのためには事実を多少ゆがめようと、イギリス=正義、テロリズム扇動者=悪党という立論が必要で、ナラシムハのようなカリスマ的ナショナリストを否定的に描く一方、メリヴェイルを理想化する必要があった。インドのナショナリズムに理解を示しつつ、イギリス支配を弁明しているキャンドラーの両面感情

28) Candler, *Youth and the East*, 215.

29) *Ibid.*

は、有りそうで無さそうなナラシムハの描出と、メリヴェイルが貢献したペスト対策のエピソードに浮き彫りにされている。

## VI

9年間ラホールでヴェーダを学び、その哲学をケンブリッジ大学で講義したといえ、クリシュナヴァルマが連想されるものの、ナラシムハは決して公に反英感情を口にしなかった。クリシュナヴァルマは、ロンドンやパリで堂々とナショナリズムを煽る雑誌を発刊し当局から弾圧されそうになったが、ナラシムハの本拠地はカシミール山中にあり、インド各地での演説は単にアーリア・サマージが提唱するような「墮落した」インド人の自己改革を訴えるものである。ナラシムハがナショナリストに転じたのは、ケンブリッジ時代に「黒人」(nigger)呼ばわりされた人種差別がきっかけとされる。しかし、ウッジェイン(Ujjin)でヨガを修得し、ラホールでヴェーダ哲学を学んだ後、イギリスやヨーロッパ大陸で西洋の教養や知識を身につけてフランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語を流暢に話せるようになった彼は、ヨガに興味のあるようなヨーロッパ人から「神格化」され、イギリスの社交界のパーティーでヴェーダの講演をする名士でもあった。その講演からインスピレーションを受けたイギリス、ロシアの女性たちは彼に「弟子入り」を求め、あるロンドンの「精神性の高い」上流階級の婦人は「彼の足もとに跪き、自らのすべてを彼に捧げた」(136)。ヨーロッパのみならず、彼はアメリカでも高く評価され、彼を導師と仰いだ人々の中には、自らを「ヒンドゥー教徒」と自称する者もあった。しかし、欧米人がヴェーダ哲学の真髄まで学ぼうとしない態度に、ナラシムハはそれはインド人のみに理解できる思想であることを悟り、インドへ帰ってナショナリズムに傾倒するようになる。無論、欧米人からも注目を集めた彼の国粹主義的な演説——「インド人は自由を得るまでは蘇生できない」(138)——はイギリス支配に喘ぐ同胞を奮い立たせ、インド青年のナショナリズムを過激化させた。「彼のような人物こそが放蕩な民族精神を束ねてその活力を方向づけることのできる超人であった」(139)。しかし、彼の演説は「インド人は蘇生するまで自由を獲得できない」という帝国主義者の論理を反駁する危険思想と見なされた。そのような思想を吹聴するナラシムハは「イギリスの最も良いものとは出会わず、出会っても理解できなかっただろう」(189)と蔑まされるばかりか、「良心がなく、何千ものシリ・ラムを犠牲にする」(188)と、その人格まで否定的に捉えられる。

帝国主義者の目からすれば、いかに宗教的に祭り上げられようと、ナラシムハのような人物こそが英印の最も「危険な混成物」ということになるのであろう。彼を形容する「シューと近づく大蛇」(hissing serpent)、「狼」という言葉には、シリ・ラムのような青年を「殉教者」に仕立てて大英帝国を屋台骨を揺さ振る威力をもつナラシムハに対する憎悪が反映されている。その一方でスケインが「私はナラシムハを尊敬する。彼は祖国のために論理的で正しいと思っていることをしている。——彼の論理は相対的なものだが」(17)と同胞に公言するのは、矛盾した話に感じられる。架空の人物とはいえナラシムハに対するそのような評価は、彼のように高学歴でカリスマ性のあった「パンジャブのライオン」ラーラ・ラージパッ

ト・ライ (Lala Lajpat Ray, 1865～1928年) やベンガル人オーロピンド・ゴーシュのイメージを改善し、彼らの反英感情を少しでも和らげたかもしれない。しかし、インド青年たちにテロリズムを煽ったとして当局から弾圧された彼らは、ナラシムハのイメージに自らが投影されているとしたならば、彼が最後は聖者のごとくカシミールに籠って息が絶えてしまうような脚色よりも、イギリス側から自分たちが受けた暴力や権力の乱用を描いて欲しかったに違いない。<sup>30)</sup> ちなみにシリ・ラムのようにイギリスの高官を殺害したとなれば、彼が黒幕や仲間を告白するように暴力を受けることも想定されたはずである。しかし、イギリス側の「暴力」が隠蔽されているのは、出版当時それを物語化するのはタブー視されていたからであろう。<sup>31)</sup> そのためには、有りそうで無さそうなナショナリストを作り上げて立役者とするほうが、出版規制に反せず、イギリスーインド双方の読者に不快感を与えることがなかったと思われる。それにしてもシリ・ラムとナラシムハを中心とした物語だけでは、「暴力が暴力で返される」可能性があったイギリスのインド支配を弁明する論拠としては不十分だった。ペスト対策のエピソードはそれを補うために好都合なテーマであったと言えよう。

## VII

『シリ・ラム』に添えられた「1907年から1910年の生活の写し」(A *Transcript from Life*, 1907-1910) という副題は、物語に挿入されるペストのエピソードが当該年代にパンジャブ地方を襲った伝染病の悲劇に符合していることを示唆している。シリ・ラムの故郷モグラオン近くとされるメルガーラ (Melghala) は、実在の町であり当地を含めたパンジャブ州にペストが蔓延した様子は、インド医療団員 (I.M.S) のW.B. バナーマンの研究報告に詳細に描かれている。<sup>32)</sup> その報告書に目を通せば、ペストにまつわる物語のエピソードにもそれなりの信憑性が感じられる。

ペストが広がるのを防ぐためにあらゆる医学的研究や国家規模の対策が試みられるのは、現代的な感覚からは当然と言える。しかし、19世紀末から20世紀初頭のインドでは、少々事情が異なった。1896年にボンベイにペストが大流行した際に、帝国政府がとった感染予防対策——住民の身体検査、住宅の消毒、感染者の隔離、検死等——はそれまで住民の私的領域や信仰に不介入政策をとっていた方針を180度転換するものであり、人々を混乱させた。とりわけ、防疫活動の名の下にゼナナ (婦人の隔離部屋) にイギリス男性医師が乗り込んだり、ペスト特有の横痃 (bubo) が、脇の下や大腿部、首にできていないか検査をするためにヒンドゥー教徒やイスラム教徒の婦人の身体検査をすることは彼女たちを「穢す」冒流行

30) ラージパット・ライは、デモ行進時に警官から暴力を受けて「殉教者」となった。その復讐のためにバガット・シン (Bhagat Singh, 1907～1931) が仲間と共に警官を殺害し、処刑された事件は有名でインドで映画化されている。ピバン・チャンドラ、前掲書、303頁参照。オーロピンド・ゴーシュはアリボール爆弾事件で冤罪をきせられ一年あまり拘留された後、釈放された。須田禎一『印度五千年通史』(白揚社、1942年) 237頁参照。

31) コフスジーによれば、『シリ・ラム』は匿名で初出版されたという。テキスト、Ⅲ参照。

32) W.B. Bannerman, "The Spread of Plague in India" in *The Journal of Hygiene*, VI. no. 2, 1906, 183-86 参照。



為であった。1897年に疫病対策委員長長のW.C.ランドがプーナで殺害された事件からは、当局の軍隊付きの防疫活動がいかにか高圧的で住民の反感を買ったかが窺い知れる。<sup>33)</sup>しかし10年ほど後の年代に設定されている『シリ・ラム』においては、ペストにまつわる防疫活動は、多少なりとも美談化されて物語られている。

ペストの流行が疑われたメルガーラに急行したメリヴェイルとジャランドールから救援に駆けつけたインド医療団員チョンセリーがまず目撃したのは、「昼夜燃え続けている」と噂された火葬の火やシーク教徒の葬儀であった。死因を疑って村長に事情を問いたずもの、それぞれ「巡礼の疲労死」、「蛇にかまれた」、「井戸に落ちた」というような答が返される。いぶかって村の出生・死亡届け台帳を調べても、そのような死亡者の記録はどこにもない。しかたなく村を視察するうちに、悲嘆にくれる老女から彼女の息子が高熱を出して亡くなり、その腋の下に腫れ物があったことを聞かされたメリヴェイルは、事の次第を察知し直ちに村内の家屋、敷地を念入りに搜索する。村の家々に踏み込めば、人目につかないように隠された遺体もあれば、瀕死状態で放置された病人もいた。井戸の中には、高熱に苦しんで水中に飛び込んだ女性の死体が浮かび、その傍らにはペストに感染したネズミの死骸もあった。ある家の中には感染を免れた幼子三人が、瀕死状態の父親と母親の遺体の傍で無邪気に遊んでいた。一刻の猶予も許されないと判断したメリヴェイルは、「ワインを飲んだように責任感で体が熱くなり」(62)、自らを「法律」にして即座に村人に避難命令を出し、家々の消毒、避難キャンプと「病院」の設立に取り掛かる。<sup>34)</sup>しかし、それは彼自身が疫病に斃れるばかりではなく、ランドの暗殺事件に象徴されるように、村人に命を狙われる可能性のある危険な仕事である。それ故、彼はできる限り村人の信仰や慣習に沿うように、避難キャンプを3区分に分け、井戸に最も近い区画にジャット族、その外側に小作人と農奴、最も離れた場所にアウトカースト(不可触民)たちを收容するように配慮した。村の男たちは、命令にいやいやながらも応じ、病人の運搬を手伝った。しかし、カーストの高い女性をゼナナの外へ強制的に出すことは「村人全員が武器を持って立ち上がるかもしれない」(64)ほど住民の信仰を無視する冒瀆行為と見なされた。息子を失った老女の避難さえ、蚤退治のために「毛髪を剃る2パイスが惜しい」という口実で親族から躊躇された。いかに為政者の命令とはいえ、村長も住民に信仰の掟を破るような勧告をするのは気が引け姿をくらます。そのような状況を予期していたメリヴェイルはジャランドールに駐屯する50人の憲兵隊の出勤を要請していた。しかし、彼らが到着するまでの3日の間に感染の拡大を阻止して、一人でも多くの村人を救いたかった。メリヴェイルの説得のかいあって、感染の疑われた老女の隔離は成

33) この事件や、ペスト防疫に対するインド人の抵抗については、Ali Kumar, *Medicine and the Raj: British Medical Policy in India, 1835-1911* (New Delhi, Saga, 1998) 196-99; David Arnold, *Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in Nineteenth-Century India* (Berkeley: University of California Press, 1993) 203-39 参照。

34) 当局は、軍隊付きの強引な防疫活動に住民が怒ってストライキを起こしたり、ティラクらが率いる反英活動の過激化を懸念して、ボンベイ管区でペストが蔓延した時に定めた伝染病条例(Epidemic Diseases Act, 1897年)を1901年に取り消した。メリヴェイルが「法となって……」はそれを意識してのセリフであり、物語で彼やチョンセリーのペスト対策がイギリス本国の左翼やインドのナショナリストから非難されるのは、後ろ盾となる法律がなかったことによると思われる。Kumar, *op.cit.*, 198 参照。

し遂げられる。しかし、チョーンセリーと共に村の奥へ入ろうとした彼はレンガを投げつけられ、ヴェールで顔を覆った若い女性が乗った籠は、棒を手にした群集に行く手を遮られて担ぎ手が逃げ出す有り様であった。群衆の中から飛び出したジャット族の一青年は大胆にも「俺たちはお前らがここにいるのが気に入くない」と侮辱的な言葉を浴びて、二人の行く手を遮る。怒ったチョーンセリーは彼を殴り倒し、メリヴェイルと共に杖を振りかざしながら群集を退散させる。本来ならば、公務を妨害した若者は殴られるだけではすまないが、チョーンセリーは通りがかった船頭に卒倒したふりをした若者を介抱させる。体裁の悪くなった若者は一目散に退散し、間もなく村長に伴なわれて謝罪の意を示し、彼の罪は不問に付される。その様子を目撃した群集の怒りは静まり、置き去りにされた籠は隔離キャンプへ無事に運ばれる。

避難命令に応じたとはいえ、村人たちは家に置いてきた宝石、現金、家畜類が気がかりだった。避難キャンプには生業が営めず、その日暮らしの村人は生活に困った。苦情を訴えられたメリヴェイルは、彼らが置き去りにした宝石の管理や家畜の世話を約束し、食料を買うためのクーポン券を避難民に与える。20日後には現地に医療団が到着し、何人かの感染患者は治療を受けて回復に向かった。憲兵隊の協力で家々の消毒も完了し、感染を免れた人々の生活は元に戻っていった。避難前の死者32人に対し、キャンプや診療所で亡くなった人数2人という結果に、村人はイギリス流のペスト対策を見習うべきものとして評価し、メリヴェイルは「神」(Providence)として頼りにされるようになる。しかし不幸にも、メルガーラに蔓延ったペスト菌は、通行規制の網の目を潜り抜けた女性のヒル治療家によって、18マイルほど離れたモグラオンに持ち込まれる。また病人の治療を続けるためにメルガーラに居残ったチョーンセリーは、予防接種を受けていたにも関わらず、<sup>35)</sup> 疲労が重なってペストに感染し他界してしまう。

## VIII

メルガーラからモグラオンにラクダで駆け付けたメリヴェイルは、伝令から報告されたようにペスト騒ぎで住民が「一人の女性を残して」避難し、村に人気がないことを確認する。しかし、彼はその「一人の女性」を助けることに責任を感じて家々を探しまわる。まもなく彼が出会ったのは、息子二人を失って生きる気力を無くして村に居残った老女で、彼女からムール・チャンドの家にシリ・ラムの妹シヴ・ダイが置いてきぼりにされていることを知る。そこで彼は、少女を助けようと老女に必ず助けに戻ることを約束してからムール・チャンドの家を訪れ、ペストに感染して意識も朦朧としていたシヴ・ダイを発見する。熱に浮かされながらも母親を呼び求める彼女の姿は何とも哀れで、メリヴェイルは彼女を助けるべく抱き

35) 物語の設定年代には既にパスツール研究所出身のハフカイン (Waldmar Haffkine, 1860 ~ 1930) が開発したペストの予防接種がパンジャブでも実施され、感染率や死亡率は低下していた。カーゾン卿もその恩恵に与ったと言われる。しかし、ハフカインはユダヤ人であったため、彼の研究開発は様々な妨害を受けて予防接種の普及が遅れたと言われる。柴山五郎著作『印度ニ於ケル「ペスト」病状況視察復命書』(出版社不明, 1906) 36-37; Kumar, *op.cit.*, 199-202参照。

かかえて連れ出す。折しも、村の様子や両親の安否を探りに来たシリ・ラムに出会った彼は、シヴ・ダイを彼に託して避難キャンプの位置確認や「病院」の設置のためその場を離れる。ところが、既に退学していたシリ・ラムは両親に再会するのが憚られ、メリヴェイルに妹の面倒を見ることを受け合いながらも、彼が戻ってくることを期待して彼女を置き去りにする。彼は命がけで妹を助けようとしたメリヴェイルの義侠心に感謝するどころか、そのような行為がナショナリズムを妨げるように感じて、次のように憤る：

ここに一族が見捨てたインドの少女を助けるために、自分の命を危険にさらしたり睡眠を犠牲にするメリヴェイルがいた。彼は自分の言葉に満足げで自尊心もない。シリ・ラムはイギリス人を憎み、彼の面前では恥ずかしくて不愉快だったので事態をそのようには受け止めることができなかった。

シリ・ラムには自分の当惑を分析したり、事実から偏見をふるい落とすという発想ができなかった。もしできたとしたなら、最も不満に思うことが、実際のメリヴェイルの行動には見い出せないと感じるからだ。彼のような男こそイギリス人の典型である。シリ・ラムはただ「一体全体なぜこの憎い外国人がここにいいのか。どうして彼はアーリアの民より優れているのか。肌が白いから自分の村へ来て、ここそこへ行くと一族を動かしたり他人事に干渉し、僕の妹を何者でもないかのように腕に抱く権利があるのか。」

(116)

シリ・ラムが「恥ずかしくて不愉快だった」のは、メリヴェイルに自分の家が泥で固めた粗末な作りで、危篤状態の妹を家に置き去りにする父親が、アーリア・サマージストが批判するような「義務感のない墮落したインド人」であることを知られた故であった。彼には、ムール・チャンドが英語どころか土語のウルドゥー語も読めず、「先進的な自由主義思想」にも無縁で、イギリス人にへつらうことも腹立たしかった。一たんは持参金の節約になるとシヴ・ダイを見捨てながら、メリヴェイルのおかげで彼女の命が助かれば、ムール・チャンドが彼を神のように敬うのも滑稽で恥ずかしかった。ヒンドゥー教徒の中には「母親や妻、娘、姉妹を病院へ送り込むために家から出すことに同意するくらいなら、ペストで死んだほうがましだ」<sup>36)</sup>と抗議した者もあるというのに、「彼の家は押し入れられ、ゼナナのプライバシーが侵害された」と当局からの視察官に説明されても、ムール・チャンドは「イギリスの旦那は私の幼い娘を助けてくれた」と答えるだけだった。彼は、「メリヴェイルやチョーンセリーがパンジャブ州に大災難がもっと広がるのを防いでくれた」ことを信じて疑わなかった。チョーンセリーの亡骸は、本人が望んだように、メルガーラ郊外の丘に葬られ、その墓は村人から「神殿のように祭られた……彼の墓にはオベリスクが建てられ、マリゴールドの花がまき散らされた」(125)。

シリ・ラムを憤らせ、本国の左翼やインドのナショナリストから非難されたとはいえ、現地の実情に疎い読者は、メリヴェイルとチョーンセリーの献身的な防疫活動は、ペストと共に帝国主義が消毒されたような印象を受けたであろうか。とすれば、メリヴェイルがシリ・ラムに暗殺されるという運命は、何とも皮肉で不条理な話ということになる。それでも、シリ・ラムが10年の教育を受けても「思考力は、ほとんど進展しなかった」となれば、恩を仇で返したような彼の犯罪も、ペストに感染した妹を放置する無責任さにも情状酌量の余地があ

36) Kumar, *op.cit.*, 197 からの引用。

るように感じられるであろう。しかしナショナリストの読者は、シリ・ラムが怒ったのは、メリヴェイルが妹を「何者でもないかのような腕に抱く権利」は、即ちヒンドゥー教徒を「穢す」行為と見なされる故だと受け止めたのではないだろうか。ボンベイやベンガルの高カーストのインテリ読者は、防疫活動が成功したエピソードの舞台に、メルガーラやモグラオンが選ばれたのは、当地の土地所有農民ジャット族がヒンドゥー教徒、シーク教徒を問わず、殆どが文盲で自分たちほど宗教的戒律に拘らないためであると察知したかもしれない。新聞も読めず都会の様子がわからない村人たちは、メリヴェイルのような人物が「イギリス人の典型」と言われても、さほど違和感を覚えないかもしれない。また消毒の石炭酸が振りまかれる泥の村モグラオンがネズミやゴキブリだらけで不潔であればあるほど、イギリスの防疫活動も効果的に思われる。インド人＝不潔で無知・蒙昧、イギリス支配者＝有能なヒューマニスト・衛生管理者という二項対立の図式は、舞台が辺鄙なパンジャブの農村だからこそ成り立った。実際にメリヴェイルやチョーンセリーのようにインド人の医療や福祉のために命を賭けたイギリス人もあったとはいえ、バラモンやインテリが多い都市部ではそのような図式は成立しない。また物語が明らかにしているように、パンジャブの農村には医療設備がなく、農民の保健・衛生問題に当局は無関心だった。ちなみに当時は都会の官立病院でも十分な数の医療スタッフが確保されず、インドのペスト治療は日本の衛生官の目にも褒められるべきものではなかった。<sup>37)</sup> たとえ病院に運ばれようと、予防接種を受けていない感染者の致死率は極めて高かった。そのため、メリヴェイルやチョーンセリーの献身を浮き彫りにするためとはいえ、隔離キャンプや仮設の「病院」に運ばれた患者や感染が疑われた人物——シリ・ラムの母親、妹、息子を失った老女二人——が予防接種もしていなかったのに命拾いしたという話も信憑性に欠ける。<sup>38)</sup> さらに経済学的な視野に立てば、当時のペスト対策に関しては、19世紀末まで原住民の保健・衛生に関心を向けなかった帝国政府が、ペストの防疫活動に躍起になったのは、インドと交易のあった諸外国からの圧力もあった背景を見逃せない。インドにおけるペストの大流行を知った貿易取引国の中には、当地からの輸入貨物に検疫を義務付けたり、インドとの取引を中止しようとする国が少なくなかった。とりわけ、フランス、ドイツでは中世のペストの大流行が記憶に蘇り、帝国政府に迅速な対応を迫った。したがって、ペストを撲滅してインド人の命を救ったという大英帝国の栄誉は、その経済的な営利に堅く結び付いていたと言える。

インドにおいてのみ、異常にペストが地方に感染していった原因が、ネズミや蚤の繁殖に適していた住民の家屋構造、生活習慣にあることは否めない。それはバナーマンの報告書の

37) 1906年、北里研究所の柴山五郎作博士はペスト対策を研究・報告するためインドへ渡り、ボンベイの官立マラータ病院を視察した。彼は病院に収容されている86人のペスト患者に対して、医師が一人と無資格の助手が一人、昼夜三交代で働く欧米人看護婦6人がいるだけで、腺種の切開を「消毒」の重要性のわからぬインド人のクーリー（苦力）が担当していることに驚いたようである。柴山五郎作、前掲書、40頁参照。

38) 1902年から1903年にかけてパンジャブ州では、総人口の約23%の186,797人が予防接種を受けていて、感染した者が3,399人、死亡者814人であった。一方未接種者は639,630中49,433人が感染して、29,723人が亡くなったと報告されている。ちなみに、クマールによれば、1896年から1918年の間にペストで死亡したインド人は2千万人以上という。柴山五郎作、前掲書、36頁；Kumar, *op.cit.*, 190-91参照。

みならず、ペストの流行時にボンベイを視察に行った日本の柴山五郎作（博士）や岡崎龜彦（医師）の報告書からも窺い知れる。彼らは原住民の住環境の劣悪さや衛生観念の欠如、ネズミも含めた動物愛護の精神のために、イギリスの防疫活動が思うように進まないことに理解を示している。<sup>39)</sup> 日英同盟を意識してか、あるいは日本にまでペスト菌が運ばれることを恐れてか、彼らの報告書は当局のペスト対策には好意的で、その成果を統計的に示している。確かに、インド人を激怒させた帝国政府の防疫活動は、他国にペストがほとんど広がらなかったことを考慮すると、医学的にはそれなりに評価されるべきであろう。しかし、それが帝国主義を正当化する口実にはならず、むしろインド人の反英感情を高めて帝国の瓦解を早めたとすれば何とも皮肉な話である。また見方を変えれば、ペストがインドに蔓延した原因は、「蚤」が何であるかわからないような無知な状態に住民を放置した政府の教育政策にもある。イギリス人ならば初等教育、あるいは家庭や共同体内で最低限の衛生教育を授けられそうなものの、インドの農村の大多数の住民は、ムール・チャンドのようにろくな初等教育も受けられなかった。小学校に相当するものがあつたとしても、それはお粗末なものだった。シリ・ラムの教育に関して「初期教育の工程は劣悪で詳述するのも憚られる」というのは、そのような状況を認識していた著者が暗に帝国政府の教育対策を批判しているようにも思われる。彼の「思考力は、ほとんど進展しなかった」というのも、当局が改善しようとしなかった泥にまみれた農村の生活環境やお粗末な「初等教育」制度にも原因があるといえよう。しからば、彼はナラシムハの「生贄」であると同時にイギリス帝国主義の「犠牲者」であつたと言っても過言ではないように思われる。またキプリングの物語に登場するような「白人の責務」を担ったメリヴェイルやチョーンセリーも——彼らが「イギリス人の典型」とは言えないにしても——インド支配のための「殉教者」として見なされるべきであろう。

## おわりに

『シリ・ラム』の悲劇的な幕切れからは、インド体験そのものはキャンドライにとって、「東洋に関心をもつ」のは、「光り輝く何ものかである」ことに繋がらなかったと言えよう。現実のインドは、キプリングの物語に描かれているように「悠久の大地」でも、白人の責務を体現してその榮譽を得られる場でもなかった。英文学を曲解し、ナショナリストの「ヴェーダに帰れ」の声に魅かれるインドの学生に接触し、著者は異文化の理解に限界を感じ、「文明に光を」というスローガンも単に帝国主義を正当化する口実に過ぎないことを認識した。インド人の9割近くを占める農民は泥にまみれた環境におかれ、ペストが流行すれば、「ネズミのように」その犠牲になった。そのような状況を目の当たりにした彼にとって、少数ながらも命がけでインド人の命を救おうとした医療関係者や行政官だけは「光り輝いて」見え

39) 岡崎医師は三重紡績株式会社の衛生監督で、インドから輸入される綿にペスト菌が付着している可能性や、感染したネズミが貿易船内に生息していないかを懸念していた。ボンベイを視察した彼は、多くの住民が家族の数より多いネズミと共に暮らし、「蚤はいかなる動物なるやも之を知らぬ」ことに驚き、防疫活動が困難であることを悟った。宇野利右衛門編『印度におけるペスト』（工業教育会、1913年）10-23頁参照。

たに違いない。彼らがチョーンセリーのように自らの骨をインドに埋める覚悟で「インド人のため」に献身したとすれば、正にイギリス人にとって「東洋は生涯をかけるべき仕事」だったと言えよう。インド人がそのように彼らを受け止めなかったとしたら、イギリスの思想や文化の影響力ではなく、政治的な問題、即ち帝国主義の矛盾であったと思われる。それはブラフモ・サマージ、アーリア・サマージを問わず、そのメンバーが社会改革や自己変革に乗り出したのは、イギリスの文化・思想の影響であったことから理解できる。確かに風土や宗教、生活様式が異なるインド人が英文学を理解するのは困難であったかもしれない。しかし、中にはサロジーニ・ナイドゥーやタゴールのようにイギリス人から称えられた英詩を創作するインド人もあった。英語教育が国民のごく少数にしか行き渡らなかったとしても、そのエリートたちは、英語を通じてイギリス人が研究した祖国インドの古典や歴史を知ることができた。英語はヒマラヤ山麓からコモリン岬に至るインド人の共通語となり、イギリス人の期待に反してナショナリズムを発展させた。今日ではIT産業を発展させる手段としても大いに役立っている。キャンドラーが現在のインドの発展ぶりを目にするのができたなら、「学生たちの知性を過小評したのではない」という自分の判断が正しかったことを嬉しく思うであろう。彼の20世紀初頭のインド体験は「光り輝く何もの」ではなかったとしても、ナショナリストの視点からインド人を理解し、イギリスのインド支配の問題を提起した物語『シリ・ラム』には、インドを「生涯をかけるべき仕事」にしようとした著者キャンドラーの熱意が窺い知れる。

#### 【参考文献】

- Arnold, David. *Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in Nineteenth-Century India* (Berkeley: University of California Press, 1993).
- Bannerman, W.B. "The Spread of Plague in India" in *The Journal of Hygiene*, VI. no. 2, 1906.
- Bhar, Lauren S. & Johnston, Bernard, eds. *Collier's Encyclopedia: with Bibliography and Index* (New York: P. F. Collier, 1995).
- Bhatt, B. D. & Aggarwal, J. C., eds. *Educational Documents in India, 1813-1986: Survey of Indian Education* (New Delhi: Arya Book Depot, 1987).
- Boehmer, Elleke, ed. *Empire Writing: An Anthology of Colonial Literature 1878-1918* (New York: Oxford UP, 1998).
- Candler, Edmund. *Siri Ram: Revolutionist* (Bangalore: Arnold Publishers, 1990).
- Candler, Edmund. *The Sepoy* (London: John Murray, 1919).
- Candler, Edmund. *Youth and the East: An Unconventional Autobiography* (London: William Blackwood and Sons, 1924).
- Candler, Edmund. *The Unveiling of Lhasa* (London: Thomas Nelson & Sons, 1905).
- Chirol, Valentine. *Indian Unrest* (Middlesex, Echo Library, 2007).
- Kumar, Ali. *Medicine and the Raj: British Medical Policy in India 1835-1911* (New Delhi: Sage, 1998).
- Kumar, Krishna. "Hindu Revivalism and Education in North-Central India" in *Social Scientist*, XVIII, No. 10, 1990.
- Langohr, Vickie. "Educational 'Subcontracting' and the Spread of Religious Nationalism: Hindu and Muslim Nationalist Schools in Colonial India" in *Comparative Studies of South*

- Asia, Africa and the Middle East*, XXI Nos. 1& 2, 2001.
- McCulloch, Gary. "Empires and Education: The British Empire" in *International Handbook of Comparative Education*, eds. Robert Cowen and A.M. Kazamias (Dordrecht: Springer, 2009).
- Pandey, Dhanpati. *The Arya Samaj and Indian Nationalism, 1875–1920* (New Delhi: S. Chand, 1972).
- Pathak, R.P. *History, Development and Contemporary Problems of Indian Education* (New Delhi, Kanishka, 2007).
- Rai, Lajpat. *The Problem of National Education in India* (London: George Allen & Unwin, 1920).
- Singh, Bhupal. *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974).
- Tickell, Alex. *Terrorism, Insurgency and Indian-English Literature, 1830–1947* (London: Routledge, 2012).
- Viswanathan, Gauri. *Masks of Conquest: Literary Study and British Rule in India* (New York: Columbia UP, 1989).
- 岩永博 『インド民族史』(今日の問題社, 1944年).
- 宇野利右衛門編 『印度に於けるペスト』(工業教育会, 1913年).
- 加藤長雄 『印度民族運動史』(東亜研究所, 1942年).
- 見市雅俊〔他〕編 『疾病・開発・帝国医療：アジアにおける病気と医療の歴史学』(東京大学出版, 2001年).
- 柴山五郎作 『印度ニ於ケル「ペスト」病状況視察復命書』(出版社不明, 1906年).
- 須田禎一 『印度五千年通史』(白揚社, 1942年).
- チャンドラ, ビバン著, 粟屋利江訳 『近代インドの歴史』(山川出版, 2001年).
- 東亜研究書編 (1941年) 『イギリスの對印度教育政策』復刻版 (龍溪書舎, 2007年).